詩篇２７篇の黙想：「主はわたしの光」（2020 年 5 月 23 日用　ＴＭ）

「主はわたしの光、わたしの救い/わたしは誰を恐れよう」。私の記憶では詩編で主なる神ご自身を「光」（オール）と語る信仰が登場したのはここが初めてのように思います。（参照イザヤ 60: 1 、2：5）光は闇の中に照り輝き、往く道を照らし、真実を明らかにします。闇が際立ち、新型コロナウイルス感染の不安と恐れ、理不尽な突然死に胸が痛みますが、少し収束に向かっています。職を失い、廃業閉鎖の背戸際に追い込まれて耐えている市民たちがいます。病院で奮闘している医師・看護士たちもいます。社会の中で黙々と他者のために労している人たちがいます。それらの人々と共に、権力を握り、パフォーマンス的「政治的決断」を連発するものたちもいます。主は光です。「人々を恐れてはならない。覆われているもので現されないものはなく、隠されているもので知られずに済むものはないからである」（マタイ 10：26）。主は光です。主は私の光である。あなたの光です。

・恐れの対象　詩編の書き出しの言葉は「主」（ヤハウェ）です。主は「わたしの光」、「私の救い」（wəyiš‘î）、「わたしの命の砦（mā’ōwz）」（「わたし」は「砦」ではなく私の「命」にかかっています）。9 節「主はわたしの助け」（1 節と同じ）。「誰を恐れよう」、「誰の前におののくことがあろう」を「主なる神を畏れ、主の前におののこう」という翻訳が可能か考慮しましたが、そのように読むことは難しそうです。しかし、信仰的にはそう言えるでしょう。貪欲な、偽証する者たちのただ中で（11－12 節）主こそ光であり、救いです。脅かされた命の拠り所です。

・一つの願い、一つの求め　4 節を家訓、人生訓にしている信仰者は多いでしょう。「一つのことを主に願い、それだけを求めよう」。私たちは何を求めているだろうか？詩人は、「命のあるかぎり（私の生のあらゆる日々）、主の家に宿り/主を仰ぎ望んで喜びを得/宮で朝を迎えることを」願います。原語には「朝」はありません。「主の美（bēnō’am）を見ることを、彼の神殿で主を尋ね求めることを」。口語訳「主のうるわしきを見、その宮で尋ねきわめんことを」。エルサレムの神殿という場所も大切ですが、「主の美」を恋焦がれるのである。素晴らしい表現であり、内実ではないでしょうか！

・主はかくまい、高く立たせ給う

5 節は一見矛盾しているように思えます。「さいなむ者」「敵」に直面し、「災いの日に」主は「仮庵」にひそませ、幕屋の奥に「隠して」くださる。他方、群がる敵対者の中で、太陽の下、公然と「岩の上に立たせ、頭を高く上げさせて」くださる。主イエスは「あなたがたは地の塩である、あなたがたは世の光である」（マタイ 5：13－16）と言われました。弟子が塩のような隠れた形と山の上の街のように見える形の両方で主の弟子であるように（ボンヘッファー）、主なる神は私たちを一方で隠し、他方で、頑丈で大きな岩の上に立たせ、うなだれることなく、頭を高く挙げさせて下さる。

・主のみ顔　7－9 節では「顔」が登場します。「顔」とは他者に向かう「わたし」のことです。「主よ、呼び求めるわたしの声を聞き/憐れんで、わたしに答えて下さい」と叫びます。前半の明るいトーンから少し暗い色調になります。自分の心が言うのか、神が言われるのか判然としませんが、過ちに悩む信仰者は顔を上げると、主なる神はみ顔を見せてくださるのです。「私の顔を尋ね求めよ」。

・父母を超える主の愛　親の過剰な愛着、あるいは、放置・無視・怠業によって子どもたちはいかに傷つけられてきたか！むろん、愛情を受ける子どもの感受性にも問題があったのでしょう。親も余裕がなく傷ついていたのです。主なる神は父母の愛を超えて、彼ら・彼女らが見捨てようとも私たちを迎えて下さる（10 節）。だから、主を待ち望もう！（14 節）私は信じる（he’ĕmanti　アーメンという者）。主は「恵み深い（善い Goodness）」お方です。